



## 「子ども」だらけの国

校長 三村 孝志

「おとなしい」という言葉があります。表記は「大人しい」です。手元にある辞書を繙くと「おだやかで、さわいだり、反抗したりしない」と説明しています。この前には「大人げない」が項目として立てられており、「大人としてのおちつきや考えぶかさがない」と書かれています。騒がしかったり、落ち着きがなかったり、考え深さがなかったりすると大人として見られないのかもしれませんが。

大人とは何か。説明はいろいろあるでしょう。小浜逸郎さんは「大人」という概念を整理し、「生理的大人」「社会的大人」「心理的大人」に分けて説明しています(『正しい大人化計画』)。「生理的大人」は子孫を残す能力をもっていること、「社会的大人」は経済的に自立し、責任果たす力をもっていること、「心理的大人」は落ち着いており、場面に応じた態度ができること、知恵や知識をもっていること、を意味します。この整理の仕方を参考にすると、生理的には大人でも、社会的に大人でないとか、社会的に大人とは言えないが、心理的に大人であるとか、そういう事態があるとわかってきます。

内田樹さんは、大人たちから生き延びる方法を学ばなければ、あと三十年後には日本は子どもばかりの国になってしまうと言っています(『子どもはなぜ勉強しなくちゃ行けないの?』)。

見た目はおじさん、おばさんですけど、中身は小学生のまま。自分のことしか考えないで、欲しいものがあれば「欲しいよお」とじたばたし、気に入らないことがあれば「責任者出てこい!」とわめき立てるような人ばかりになる。「子ども」というのは、「欲しい」と言えば誰かがそれを持ってきてくれると思っている人のことです。「責任者出てこい」と言えば、だれかが「はい、私が責任者です。トラブルはぜんぶ私が片付けますから、みなさんはそこらへんでごろごろしててください」と言ってくれると思っている人のことです。

内田さんの説明では、生理的には大人であるにもかかわらず、心理的に子どもである人のことを「子ども」と言っているようです。内田さんは「大人」を次のように説明します。

その反対に、「子ども」のために欲しがっているものを探し出してきたり、トラブルを片付けてくれる人のことを本当は「大人」と呼ぶのです。

現在、ニュースや情報番組で、大学のアメリカンフットボール部選手が危険なタックルをした問題が何回も取り上げられています。この報道を見ていると、「大人」とは何だろうかを考え込んでしまいます。危険なタックルをした選手のチームの監督やコーチの会見は、とても残念なものでした。責任ある大人の会見とは言えません。誠実さや当事者意識が欠け、その場にふさわしい態度であったとは思えません。一方、タックルをした選手は、20歳だそうですが、その会見は大人の会見と言えるように思います。当該選手には、自分がこの問題の当事者であるという意識がきちんとあるようです。自分がかかわった出来事のうち、事実だと思ったことのみを述べようとしており、会見を聞く限りでは、伝聞に基づくことは述べていなかったようです。これが、彼の会見が、大人としての会見であると言える理由の一つです。

ネットで流されていた理事長のインタビューも酷いものでした。大学運営の責任者である意識が欠如していると思えません。しかし、このように、一方が正しく、一方が正しくないという雰囲気できたときは、少し冷静になる必要があります。各メディアの報道や会見での質問の仕方には、自分たちが気にいらぬ内容だと、全く認めないというような姿勢が感じられます。現在、事実が明確になっていないにもかかわらず、一方の会見内容を全く認めないというのは、「欲しいよお」とわめく子どもと変わりません。

日本社会は、少子高齢化で、子どもが少なくなっていますが、すでに「子ども」だらけの国になってしまっているのではないかと危惧せざるを得ません。